

【S S H海外研修 [12月16日(火)～24日(水)]】

昨年度に引き続き、Sクラス（2年6組）から4名がタイを訪問しました。中心となった活動は、タイ王国から招待を受けて参加した「タイ・日本学生科学フェア（T J S S F）」です。12月17日(水)～19日(金)の3日間、首都バンコクの北に隣接するパトムタニ県にある「プリンセスチュラポーン科学高校（P C S H S）」のパトムタニ校を会場として開催され、日本からは21の高校と15の高専が参加し、多くのタイの高校生と一緒に科学を学び合いました。

[12月16日(火)]

早朝の高速バスで長崎駅前から出発しました。福岡空港で出国手続後、航空機に搭乗し、約6時間の空旅を経て、現地時刻（日本から-2時間）14:00にバンコクのドンムアン空港に到着しました。入国後、世話校であるP C S H Sブリラム校の先生の出迎えを受け、T J S S Fの会場に向かいました。この日からの4泊は、この学校の学生寮での宿泊となります。まずは、参加登録をし、翌日の発表へ向けてポスターを設置し、その後、タイの高校生と英語で親交を深めました。

[12月17日(水)]

T J S S F初日は、タイ王室のシリントーン王女を迎えての開会式で始まりました。13:30からは参加生徒が一同に集まってのポスタープレゼンです。本校4名も各自の課題研究について発表しました。

◦“Propagating Yellow-Green Cherry Trees Using Tissue Culture”

(組織培養を用いてのギョイコウザクラの増殖)

◦“Callus Formation in Red Radish by Tissue Culture”

(組織培養によるアカダイコンのカルス形成)

◦“Creating Artificial Fish Reefs to Reduce Abandoned Bamboo Forests”

(放置竹林問題の解決へ向けての竹魚礁の開発)

◦“Improving Memory Using Herbal Scents” (植物の香りを用いての記憶力の向上)

聞きに来てくれたタイ人の高校生に向けて、英語で一生懸命説明し、うまく通じたり、興味を示してくれたりしたときには嬉しそうにしていました。夕刻からの歓迎会では、タイの伝統的な音楽や舞踊を満喫しました。

[12月18日(木)]

T J S S F 2日目の午前は、参加生徒による課題研究のスライドプレゼンです。それぞれ割り当てられた教室で発表しました。今回の海外研修でのメインイベントかつハイライトとして、タイの高校生を前に緊張と不安が入り混じる中で、自分達が取り組んでいる課題研究について英語で発表し、事前の準備や練習の成果を存分に發揮することができました。午後の「サイエンスアクティビティ」では、日本とタイの混合で約60チームを編制し、「ピンポン玉が途中で止まらずに15秒という決められた時間で到達するような模型を紙で作成する」という課題に取り組みました。本校の4名は別々のチームに分かれ、それぞれが真剣にかつ楽しそうに創意工夫を凝らしながら、T Jでの協働を図っていました。

[12月19日(金)]

T J S S F最終日です。3つの校外実習コースの中から、本校4名は「ラマ9世国立科学博物館」を選択しました。この博物館で展示を通して自然との共存や王室の貢献について学び、また、ラボ実習では土壤分析に取り組みました。午後には会場校に戻り、前日同様にT Jでチームを編制し、英語で意見交換をしながら、博物館での学びをデジタルポスターにまとめました。浴衣や道着などの和装で参加した送別会では、タイの高校生による舞踊などが次々と演じられ、初日の歓迎会同様の盛り上がりを見せました。この4日間の滞在で、タイ人高校生と交流しながら、科学英語を海外で発信するという貴重な体験をすることができました。

[12月20日(土)]

4日間お世話をしてくれたタイ人高校生（バディ）から早朝の見送りを受け、名残惜しい気持ちで P C S H S パトムタニ校を後にし、ドンムアン空港に向かいました。9:45 発の便でドンムアン空港からチェンマイ県へ移動し、タイ研修の後半へと移ります。到着後、現地添乗員の案内で「サイアム昆虫園」を訪問しました。ここでは熱帯に生息する多種多様の節足動物（昆虫類他）が飼育および標本展示されていました。園内でナナフシやサソリなどを間近で観察し、触れ、行動や生態について学習し、節足動物の多様性を実感しました。また、チョウの標本作成に挑戦し、生体構造を細部まで調べることにより、熱帯生態系への関心が高まりました。

[12月21日(日)]

この日の午前は山腹に広がる「シリキット王妃植物園」を訪問し、熱帯植生およびその栽培・保護について学習しました。敷地内には、温室やキャノピーウォーク（林冠歩廊）が設置され、高低様々な目線から間近で丹念に植物を観察することができました。日本には野生分布していない熱帯植物に囲まれ、植物園が果たす繁殖などの役割について具体的な理解を深め、植生保護への意識を高めました。午後には車窓に広がるタイ北部の豊かな自然を眺めながら、隣県のチェンライへと移動しました。

[12月22日(月)]

午前には日本の皇室ともゆかりがある「チェンライ淡水養殖研究開発センター」を訪問しました。ここには多くの水槽が設置され、多品種の生産性の向上が図られており、敷地内の設備と飼育・養殖されている淡水魚を見学しました。水質管理や技術開発などの取り組みについて学び、ホルモン注射も体験させてもらいました。午後に訪れた「メーファールアン財団」があるドイトン山岳地域は、ミャンマーおよびラオスとの国境地帯であり、ゴールデントライアングルと呼ばれ、かつてケシが栽培され、アヘン（違法薬物）の一大産地でした。そのため犯罪や貧困、森林破壊がはびこっていましたが、1988年からの王室財団主導のプロジェクトにより、地域が抱えていた問題が解決へ向かっています。この財団が関わる農園で熱帯果実であるコーヒーの植生と森林農法による栽培について学び、また、地域の復活と経済活性化への科学的貢献について考察を深めました。

[12月23日(火)]

いよいよタイ研修の最終日です。前日のコーヒーとの関連で「オピウム博物館」を訪問しました。ここにはオピウム（アヘン）の歴史や人体への影響などが展示されており、科学の負の側面と向き合いました。次に訪れた「チェンセン水文学調査センター」は、国境を流れるメコン川の沿岸に所在しており、水質や水流などに関する調査・研究や洪水災害の実際について説明を受けました。複数の国の利害が絡む国際河川の実情を理解し、また、水文学という学際・複合的な取り組みへの知見が得られました。4日間で訪れた施設で様々な学習資源に触れ、タイだからこそできる体験を通して、知的好奇心が高まり、科学への視野が広がりました。そして、T J S S F と併せて、多くの研修成果と思い出を胸に、チェンライ空港を飛び立ち、ドンムアン空港で深夜便に乗り継ぎ、帰国の途に就きました。

※「アルバム編」もぜひご覧ください。